私の東京大学 FLY Program 体験談

Three Cases of Freshers' Leave Year Program

東京大学文科 1 類 2 年　**山田　智子**

東京大学文科 2 類 1 年　**坪田　大河**

東京大学文科 3 類 1 年　**山口　　集**

YAMADA Tomoko (Undergraduate Student, The University of Tokyo)

TSUBOTA Taiga (Undergraduate Student, The University of Tokyo)

YAMAGUCHI Atsumu (Undergraduate Student, The University of Tokyo)

キーワード：ギャップイヤー、バックパッカー、海外留学

一年間大学から離れて学んだこと What we learned in a year without the university

＜東京大学文科 1 類 2 年　山田　智子＞

前例のないプログラム

FLY Program は、私の東京大学への入学が決まった 2013 年の春から導入された、日本では前例のないプログラムだった。秋入学制度を取り入れる前段階として東京大学が新たに設けた、欧米の大学では既に普及している「ギャップイヤー」に準じた制度である。ゆえにこのプログラムは通常の交換留学などとは異なり、休学する一年間の計画は全て学生本人が立てる。私はこのプログラムを利用し、2013 年の 7 月から 2014 年の 3 月までカナダのトロントで活動を行った。

活動の概要

ここで私の一年間の活動の概要を紹介する。2013 年 7 月までは活動の計画と渡加準備、7 月に渡加、語学学校に通い始めると同時にホームステイを行い、9 月からボランティアを開始、10 月に学校を卒業し、ホームステイを終了してシェアハウスに移り住んでアルバイトを行い、2 月後半から北米西海岸を旅行し 3 月初旬に帰国した。

語学学校での日々

私がトロントへ来て最初に行った活動が３カ月間の語学学校での英語の勉強だった。私が学校に通おうと思ったのはもちろん自分の英語力を伸ばしたかったからということもあるが、語学学校には世

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

界各国から生徒が集まってくるため、英語圏以外の国の友達を作り様々な文化を学ぶいい機会になると思ったから、というのもあった。その目的通り、毎日世界各国のクラスメートと共に英語を学ぶのはとても楽しい体験で、母国語や自国で受けてきた英語教育によって英語のどの点に難しさを感じるかが異なるというのは面白い発見であったし、様々な文化的差異を感じることができた。例えば日本人や韓国人は複雑な単語を覚えることに苦労するが、南米人は複雑な単語の場合、母国語と似た単語であるため覚えやすいようで、逆に一見簡単そうに見える句動詞に苦労していた。語学学校で過ごした３カ月は、誰も知り合いのいない異国の地での初めての友達作りの機会、そして初めての海外生活の初めの一歩となり、その後の私のトロントでの生活の基礎を作ったと思う。

海外でのアルバイト

私の活動の一番の目的は、英語圏で英語を使ってアルバイトに挑戦することであった。日本でのアルバイトの経験はほぼなかったが、仕事をすることで学べることは多くあるだろうと考えたため、ワーキングホリデービザを取得し、語学学校終了後にいくつかのアルバイトを行った。ここでは私のカナダでの生活の中で最も強く印象に残っている、初めてのアルバイトの経験について述べたいと思う。

仕事探しはレジュメの作成から始まった。語学学校の先生の助けを借りつつ、英文で自己アピールを盛り込んだ履歴書を作成した。カナダで仕事を手にするための方法はいくつかあるが、一番の主流が、街を歩き、自分の興味のある店に入って店長か従業員に直接レジュメを手渡すという方法である。そこで私も作成したレジュメを持って 9 月の終盤から街を歩き始めた。しかし初めのうちは店に入るのでさえ勇気が要り、まして店員に話しかけてレジュメを渡すことなど全くできず、店の前を通り過ぎることしかできない日が続いた。もともと日本にいても人見知りをしてしまうため人に話しかけるのが苦手であるうえに、自分の英語力に自信がなかったため、このレジュメ配りの方法は私にとってかなり厳しいものだった。しかし自分にとって難しいことであればあるほど自分の成長に繋がるだろうと信じていたため私はどうしてもこの方法でレジュメ配りを成功させたいと思っていた。周囲の人の励ましもあり、10 月のある日ようやくカフェに入店しレジュメを従業員に渡すことができた。その日はこの活動全体から見ても自分自身が大きく成長した瞬間のうちの１つであったと思う。しかしその後も順調というわけではなく、日によっては勇気が出ずに何時間も外を歩き回った挙句１件しか入店できない日もあった。また、やっとの思いでレジュメを手渡してもよい返事が返ってくる店はほとんどなく、1 カ月ほど、このままずっと仕事が見つからないのではないかという不安に苛まれ続けた。仕事探しも試行錯誤し、ようやく手にした面接の機会は、私の人生初めてのアルバイト先となった Tim Hortons でのものだった。

Tim Hortons はカナダの大手チェーンのドーナツ屋で、街を歩いていれば店のロゴの入ったコーヒーカップを持っている人ばかりというほどの人気店だ。初めての仕事の面接はとても緊張したが、自

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

分にとって満足のいくものとなり、数日後、私は晴れて人生初の仕事を手にした。その時の喜びは仕事探しにとても苦労した分、何にも代えがたいものだった。しかし残念ながら仕事は順調には行かなかったのである。結局私はそんなにも苦労して得た仕事を 2 週間半で辞めてしまった。理由は一つではないが、あまりに忙しくプレッシャーの多い仕事だったため精神的に辛く、続けられる気がしなくなったというのが一番の理由であったように思う。英語が不自由であることから来るフラストレーションも辛さの原因となっていた。仕事中に泣きたくなることが何度もあったが、それでもこの仕事は自分が時に悔し涙を流しながらやっと得た仕事であったため辞めたくはなかった。最終的に辞めるという決断をしたのは、それぞれの人に個性があるように人には向き不向きがあるのだから、自分にはこの仕事は向いていないのだと認めることも必要なのではないか、自分が少しでも活躍できる場のある仕事をもう一度探してみようという気持ちになったからであった。一度自力で仕事を掴んだ経験が私自身を強くしたのか、次の仕事もきっと見つかると前向きに考えられたのは一つの成長であったと思う。短い間ではあったが、自分にとっては相当辛かった仕事をしたことで学んだことは多くあった。給料には満足していても自分が楽しいと思えたり達成感を感じられたりする仕事でなければ私は続けることができないということや、共に働く人や仕事場の環境が仕事を長く続けるためには重要であるということなど、そこで学んだことは、アルバイトに留まらず私の将来の仕事選びや進路の選択の際にも自分の基準として生きてくるだろう。Tim Hortons での経験は大きな成功と挫折の一つとして私の中に強烈に刻み込まれた。

FLY Program 修了後 1 年半を過ごして

一年間の休学期間を終えて、現在大学へ戻ってから 1 年半が経過しようとしているが、FLY Program 期間中の経験が自分を変えたと気づく場面は数多くあった。カナダの保育園で働いて子供たちと接したことをきっかけに、自分も子供が欲しいという思いが強くなり、以前は何よりも自分のキャリアを重視して将来の仕事を選びたいと思っていたが、今では子供を持っても続けられるような仕事がしたいと考えるようになった。進学についても、カナダでの就労の経験から、専門的な知識が必要とされる仕事に就き、自分にしかできない仕事をしてやりがいを感じたいと思うようになったため、法律を自分の専門としていく決心がついた。

高校からそのまま大学に進学し、大学生活を過ごしていただけでは生じなかったであろう考え方の変化が、カナダで過ごした 8 カ月の間にあったように思う。FLY Program の一年はこれからも私の人生において重要な意味を持ち続けるだろう。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

バックパッカーとなって経験値をためる A great growth as a backpacker

＜東京大学文科 2 類 1 年　坪田　大河＞

バックパッカー大学生

「大学入学直後にして休学し、バックパッカーとなって海外を転々としていた大学生」と聞いて、みなさんはどのような人物を思い浮かべるでしょうか。多くの方は、さぞ海外慣れした大学生なのだろうな、肝のすわった堂々とした大学生なのだろうな、といった第一印象を抱くのではないでしょうか。私はまさに、「大学入学直後にして休学し、バックパッカーとなって海外を転々としていた大学生」であるわけですが、バックパッカーをする前は、海外で一人旅などしたこともなく（行ったことがあるのはアメリカだけですが、それは中学の短期留学のプログラムでのことです）、堂々としている大学生でもありませんでした。

はじめて海外一人旅をした国は、中国でした。飛行機で北京に降り立ったときに、僕を襲ってきたぞわぞわとした不安は、いまでもありありと蘇ってきます。旅でなによりも心配なのは、「空港からホテルまでちゃんとたどり着けるのか」ということに尽きます。僕は地下鉄を乗り継いで空港からホテルへ向かうと決めていましたし、地下鉄の乗り換えも調べていた上、ホテルの最寄り駅周辺の地図の印刷まで済ませてあったのですが、それでも不安はつのる一方です。

スリに遭わないか、強盗に遭わないか、麻薬を混入されないか･･･（中国では麻薬の所持は即死刑です。どんな理由であっても、外国人であっても、です）、不安は山ほどあります。さいわい、その日の空港からの乗り継ぎはうまくいき、宿泊施設にも無事にたどり着くことができました。

あとで知りましたが、バックパッカー界隈では、はじめての一人旅に中国は向かないそうです。というのも、中国では英語がほとんど通じないからです。実際、上海のコンビニで、店員にホテルがどこにあるかと尋ねたとき、hotel という英単語すら通じなかったのには、ショックをうけました。

やはり何事も、実行する前が一番勇気を要するものです。中国、東南アジア（シンガポール、マレーシア、ブルネイ、タイ、カンボジア、ベトナム、ラオス）、中欧（イタリア、スロベニア、クロアチア、ハンガリー、スロバキア、オーストリア、チェコ、ドイツ、ポーランド、トルコ）とかなり国々を訪れたあとから振り返ってみると、旅行の準備をしていた頃が一番不安と緊張を感じていたように思います。

なぜ世界を旅しようと思ったのか

誰でもはじめての経験というのは、不安をおぼえるものですが、それでも僕が世界を旅しようと思い立ったのは、主に二つの理由からでした。

一つは、「異なる価値観を知りたいから」でした。日本で生まれ、日本で育った僕は、日本という社会しか見てきませんでした。日本という社会には、たとえば人を騙してはいけない、モノを盗んでは

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

いけない、お年寄りは敬わないといけない、といった道徳的規範が存在しています。ところが、日本を出てみると、これらの規範が存在しない社会が見られるのではないだろうか、ふとそう思ったのです。またはひょっとすると、日本でよしとされていることが悪いとされていたり、日本でしてはいけないとされることが推奨されていたりする社会を知る機会も生まれるのではないか。

たとえば、いま私たちは銀座をぶらぶらと歩いているとします。道路には特にゴミも落ちていなく、高級ブランド店が周りに多数あり、整然とした洗練された通りを歩いています。すると、通りすがりの男が、空き缶をポイ捨てしました。みなさんはどう思いますか？私たち日本人の多くは、その男に対して怒りを覚えるなど、良い印象を抱くことはないのではないかと思います。ところが、この光景をシンガポール人が見たらどうでしょう？シンガポールではゴミのポイ捨てには高い罰金が課せられるので、その男のモラルの無さに怒りを覚えるのを通り越して、なんと馬鹿なことをするのだろう、警察に見つかったら大変なのになあ、などとあきれたり、場合によっては同情をしたりするかもしれません。もし、中国人がポイ捨ての現場を見ていたらどう感じていたでしょう。中国といっても広いですから、ポイ捨てが当たり前のように行われている地域で育った方だと仮定しましょう。きっと特に何も感じないのではないでしょうか。場合によっては、あまりに当たり前な光景であったがために、男がポイ捨てをしたことに気づきすらしないかもしれません。

アインシュタインはこう言いました、「常識とは、18歳までに身につけた偏見という名のコレクションである」と。彼が言った通り、私たちは知らず知らずのうちに、自分の育った環境に応じて形成された、偏見という名のフィルターを通して物事を見ています。先ほどのポイ捨ての例のように、一つの解釈しか存在しないはずだと断定できそうな物事には、実はさまざまな見方が存在しているのです。人は、世界を自分の都合のよいように切り取って見ているのです。僕は、アインシュタインの言う、悪い意味での「常識」を少しでも打ち破りたいとの思いで、海外渡航を志しました。

二つ目は、「本物にふれたいから」というものでした。人々の努力によって紡ぎ出された一流のモノに、僕は接してみたかったのです。それには、たとえばダ･ヴィンチが描いた絵画のように形のあるものはもちろんのこと、何世代にも渡る分析と研究により編み出された、絶妙な風味のインド料理のように、形のないものも含まれます。その土地の文化、芸能、あるいは自然だって、「本物」だと言えるはずです。教科書で学んだだけで知ったつもりになっていたものを、実際にその場に赴き、五感で感じるという体験をしたいと強く思ったのです。

異なる価値観に出会えたか

一つ目の目標である、「異なる価値観」に出会うことが達成できた具体的な例をいくつか紹介したいと思います。

衝撃的だったのは、中国の駅で乗車券を購入したときのことでした。日本であれば、「こちらが乗車

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

券でございます。」と言葉を添えて両手で乗車券が渡されるものですが、中国では、駅員はそっぽを向きながら黙ったまま乗車券を渡すだけではなく、こちらに向けて投げつけてくるのです。なんと態度の悪いことか、とはじめは思いましたが、他の駅でも駅員はみなこのようにして渡してくるので、怒りはおさまり、むしろなんだか異なる社会に来たことの感動や面白ささえも感じていました。

チェコのレストランでのことでした。日本では店員に案内されてからレストランに入るのが一般的ですが、ヨーロッパでは自分から腰掛けることが多いです。チェコでも僕はその流儀に従い、「Non-Reserved(自由席)」というパネルの置いてあった席に座りました。ふつう、しばらくしたらウェイターがやってくるのですが、15 分ほど待っても僕のところには来ませんでした。他の客の応対はしているのに、です。その後、かなり待ってからようやくウェイターがやってきました。やっと注文ができる、と安心していると、なんと「Non-Reserved」のパネルを裏返して「Reserved」に変えて、「お前の席はない、帰ってくれ」と言ってきたのです。あまりに衝撃的だったので、言い返すこともせず、店を後にしました。もしかしたらこれは外国人である僕に対する差別だったのかもしれませんが、僕が単純にそのレストランの作法をわきまえていなかったという可能性も大いにありえます。少なくともこれは、日本とは異なる社会で得られた体験の一つだといえるはずです。日本では得られなかったであろう体験に、ここでは感謝の意を表明しておきたいと思います。

ヨーロッパはさまざまな点で、日本とは異なる社会でした。まず、チップと呼ばれる制度がその代表です。日本では高級レストランやバーでサービス料を課せられることはありますが、チップは存在しません。サービス料は、客が払う金額を「店側が」決めているのに対して、チップは、店員のサービスのよしあしに応じて、「客が」自分の裁量で金額を払うという違いがあります。ヨーロッパに存在するのは後者で、しかも国によって支払い方が若干異なります。ヨーロッパを旅していて、異なる国に移ったときにチップの払い方をその都度インターネットで調べたり、あるいは現金ではなくクレジットカードでもチップ込みの料金を払ってみたりと、経験値はかなり増えたと感じています。

鉄道で移動したときのことを思い返してみると、日本などの東アジアとヨーロッパでは違いが多くあります。端的に言うと、日本と中国の駅には改札があるのに対して、ヨーロッパには一切ないのです。ヨーロッパでは、切符のチェックは、駅員が巡回することで行われます。その際、切符を持っていても、切符に乗車時刻の打刻がなされていないと罰金が課せられるという仕組みになっています。

ヨーロッパの中でもポーランドのスーパーを訪ねて気づいた点として、「アルコール」という棚に、ビールやワインが売っていなかったのもおもしろい違いでした。ビールは「ビール」というコーナーに、ワインは「ワイン」というコーナーに売られていました。どういうことかというと、ビールやワインはポーランド人にとって、「アルコール」ですらなく、水同然だということです。ヨーロッパ人はお酒に強いのだなあと、思いもよらぬ場所で感じました。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

二つ目の目標は達成できたか

二つ目の目標は「本物にふれる」というものですが、ジャンルごとにいくつか思い出話をさせてください。

まず、遺産や名所についてです。万里の長城は、壮大であり非常に感動的でした。タワーからはそびえ立つ秋の山々を一望することができ、圧巻でした。カンボジアのアンコールの遺跡群は、やはり本物を前にしないと伝わらない迫力を放っていました。仏像や壁画は、驚くほど緻密で精巧なもので、1000 年近くも昔の人々が作ったとは信じがたいものでした。

自然や景観については、マレーシアのボルネオ島の熱帯雨林で見た、テングザルやホタル、キナバル山の迫力、さらに、ラオスのルアンパバーンの町の風景など、美しい光景をこの目で見て、肌で感じることができ、心が豊かになった気がしました。

芸術もまた、僕の定義するところの「本物」に含まれる重要なものの一つですから、機会を見つけては積極的に味わうようにしていました。

タイではニューハーフショーなるものを見物しに行ったり、カンボジアでは現地の伝統芸能のアプサラダンス（写真右）を鑑賞したりしました。また、タイで映画を観ましたが、国歌が流れているときに、全員起立するということも体験できたのは貴重です。ベトナムの戦争証跡博物館、カンボジアのキリング・フィールドでは、過去に行われた戦争や虐殺を、実感を伴って感じました。

最後に挙げるのは食文化ですが、これもまた重要な「本物」の一つです。タイのグリーンカレーやクイティアオ、タイスキや宮廷料理、ベトナムのフォーやバインセオ、ベトナム中部のホワイトローズやミークアン、シンガポールの海鮮ビーフンやタイガービール、ベトナムの 333（バーバーバー）ビール、ハンガリーのパーリンカ、ポーランドのピエロギなど、それぞれの地域の名物料理を味わって、その都度感動に包まれていました。

得られた成果

「旅をして、何が得られたの？」-もう耳にタコができるほどその質問はされました。たぶん、「どこに行ってたの？」という質問の次にしつこくされる質問ですね。

僕の意見としては、この旅で得られた財産は、「旅」という経験それ自体だと思っています。いま思い出しても、異国で過ごしたどの一瞬一瞬も、かけがえのないすばらしいものです。一国一国思い出すだけで、笑みがこぼれでてしまうほどです。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

さきほどから紹介した二つの目標を達成して、大いに成長できたのはもちろんですが、ほかにも世界へ一人で飛び出してみたことでたくさん経験値がたくわえられました。世界での旅自体はもちろんのこと、旅に出る前に、資金をためるためにアルバイトを多数したこと、そして準備として何が必要かを吟味していろいろなものを購入したり調査をしたりしたこと、数多くの経験が、現在の僕の血となり肉となった、という気がしています。

そしてそれだけではなく、旅をしたあとに始まる、見方によっては平凡な大学生活を、有意義なものにできそうです。僕自身、勉強好きなものですから、異国にいたときには「勉強」が恋しくてたまりませんでした。帰国後、大学の先生方のお話を聞き、本を読んだりして自分なりに内容をまとめあげたり、自分自身の意見を構築したりという「学び」の体験を、充実したものにしているものの一つに、確実にこの旅は含まれているはずです。

さまざまな観点から、この旅は、僕を成長させてくれたものですし、それだけではなく、今後も僕を成長させてくるスパイスになってくれるものだと信じています。僕の場合は留学とは違ったものですが、こういった経験を今後なされる方は、きっとたくさん得られるものがあると思います。大いに楽しんで下さい。

世界を通した自己の相対化

〈東京大学文科 3 類 1 年　山口　集〉

初めに

私は日本では珍しいギャップイヤー制度を使い、昨年 6 月から今年の 3 月の約 10 カ月間、日本の外に出て様々な国を訪れるという希有な機会を得た。以下になぜ私が今回の着想に至ったかという理由から、今回の経験でしたこと、そしてそこから得たものを述べていきたいと思う。

なぜ大学初年次の 1 年に海外長期渡航をしたのか

高校 1 年生の 15 歳の春にタイに 1 週間滞在した。当初は同じアジアということもあり日本とさしたる違いはないのだろうと思っていたが、日常生活の一部として屋台でご飯を食べ、敬虔に仏教を信仰し、僧侶を尊敬する人々など実際には予想とは全く違った。その経験はあまりに衝撃的で、いかに自分が今まで日本とその文化の中に囚われていたのかということを痛感した。そして、その経験から海外文化への興味が湧き始め、より多くの国を見て、より多くの文化を理解しようという思いにいたった。そのために高校を休学して 1 年間旅をしようと帰国後に考え始めた。

しかし、現実的に見て高校生が休学すること、それも受験を 2 年後に控えた高校生の休学は不可能に近いことに思え、高校卒業直後に長期の旅にでることを考えていた。その中でアメリカなどの大学では入学してから大学生活を始める前に 1 年間社会に出て経験を積むギャップイヤー制度と呼ばれる

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

制度があることを知り、アメリカへの進学を漠然と検討し始めた高校 2 年の 7 月ごろに偶然定期購読している新聞の夕刊の片隅に東京大学が FLY Program というギャップイヤー制度を「最大 50 万円の支援金付きで」来年度から始めるという記事を見つけた。俄に大学初年次の休学が現実味を帯びた瞬間であった。1 年の旅でかかる莫大な予算の捻出に頭を悩ませていた中、資金面の援助を得て初年次に休学できる、この東京大学の制度は私にとってまたとない非常に魅力的なものであった。

海外長期渡航にあたっての準備

2014 年 4 月、大学に入学し、FLY Program に採用されたことで、数年来の夢の世界 1 周に向けて、実際に準備を始める段階となった。具体的には以下に列挙する。

① 支援金金額が不透明な中、アルバイトなどでできる限り自ら稼ぐこと
② 英語の汎用度が低い地域で話される一方、その言語自体の汎用性が高いスペイン語・中国語の学習
③ 海外においてより安全を期すために、またその土地の文化をより深く理解するために、現地に在住する人や深い関係を持つ人とのコネクション作り
④ 日本には存在しない病気などに対する予防接種
⑤ 実際に旅をよくされている経験者の方にお話を伺い、アドバイスをいただくこと
⑥ 海外旅行保険や必要な荷物の買い出し、ビザ取得などその他の旅に向けての具体的な行動

これらの準備を主に 4 月～5 月の 2 カ月間に渡って主に行った。特に時間と金銭面を圧迫したのが④である。黄熱病・腸チフスなどのワクチン接種は保険の対象外となるため、1 回の接種につき 1 万円～2 万円ほどかかる。また免疫をつけるために時間をおいて数回接種する必要性があり、私の場合は 5 月を丸々予防接種にあてることになった。

さらに⑥の海外旅行保険、その他の準備を含めると 30 万円近くが費やされることになり、①に書いたようなアルバイトで稼いだお金は事前準備のみで消えてしまうことになった。

②で書いたスペイン語・中国語の学習については、2 カ月の短い期間ではあったが、東南アジア一帯でよく喋られているマンダリン、そして中南米の標準語であるスペイン語を学んだ。それぞれ詳しく後述するが、最低限自分の意思を伝えられるようになっていたことでそれらの地域でのコミュニケーションひいては実際にそれらの地域の理解が深まることへとつながった。

③で述べた、コネクション作りだが、知人の方の紹介から、全く知らない人へ直接アポイントメントを取るなど幅広く行った。こうして知り得た現地に精通した日本人・日系人の方々に現地でお会いすると、生活していくことで知ることができるその国の姿、文化をスムーズにかつ深く理解することができた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

プログラム実行

実際に訪れた 28 カ国全ての国・地域について言及することは紙幅の関係上行わない。ここでは特に印象的であった国をいくつか述べていく。

（1） イラン

イランは 2014 年 11 月 15 日～30 日の約 2 週間訪れ、テヘランからシーラーズまでを縦断した。イランと聞くと多くの日本に居住する人は「テロ」「戦争」「危険」といった言葉を思い浮かべる。（ペルシャと言えば途端にイメージは変わるが）しかし、訪れて、実際に感じたイランの実像は想像していたものとは全く異なっていた。人々は今まで訪問したどの国よりも親切で、この短い滞在期間中にも旅をしている客人として扱われた私は何度もチャイやご飯をおごられた。

（2） メキシコ

メキシコには 2 月 12 日～2 月 28 日まで滞在した。アグアスカリエンテス、メキシコシティ、プエブラやテカマチャルコなどの都市を訪問した。

アグアスカリエンテスでは市内に 2 つ日産の生産工場があるため、日系人を含めて日本人の方が非常に多く、街中でも日本語の看板をいくつか見かけた。アグアスカリエンテスに日産が生産工場を敷設した理由としては以下の 5 つが挙げられる。①水資源がメキシコにおいては比較的豊富であり、工業用水が不足する恐れがない。②白人系が多く、穏やかな土地柄である。③地理的にメキシコの真ん中に位置し、自動車をメキシコに拡散するのに利便性が高い。④アグアスカリエンテスで繊維産業が衰退していた中、街が誘致に熱心であった。⑤以前の生産工場で組合と大きなトラブルがあった日産としては、組合が雇用主と穏やかな関係であるアグアスカリエンテスが魅力的であった。このような実際の企業進出の姿を知ることができたことは大きな収穫であった。

テカマチャルコでは、化粧をした「死者」達による劇で、死というものは過去を教えてくれる生と一続きの存在であるとするメキシコのインディヘナの死生観や、いかにインディヘナが暴力などで半強制的にキリスト教へ改宗していったのかということを学んだ。また、街のシンボルである Convento という教会では日本に初上陸（千葉県御宿沖に漂着後、徳川家康に謁見）したメキシコ人ロドリゴデビベーロの墓を訪れ、日本とメキシコの縁を再認識した。

ギャップイヤーについて

帰国して出会った同学に FLY Program について聞いてみると、FLY Program が「学校の定めた留学制度であり、既存の所定のプログラムを遂行するもの」といった誤解が多く見られた。総じて、プログラムに対する理解や認知度そのものが薄く、現にこのプログラムの利用者は年々減少して、今年は 3 期目にして発足当初の第 1 期の半分以下の僅か 5 名の参加者しか集まらなかった。これは、上記の大学側の PR や社会周知の不足以外にも、まだギャップイヤーという制度になじみの無いこの国では学

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

生側が制度の利用に尻窄みをしてしまうという現状がある。特に、応募期間が入学準備で多忙な時期に重なり、事前に情報を知り得ていないと応募に踏み切れないということがあると思われる。ギャップイヤーという制度から得られる体験は既に述べたように、かけがえのない貴重なものであり、今後の一層の普及・発展が望まれるが、まずは社会でのギャップイヤーに対する周知が肝要であると思われる。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.